

開業してすぐに、会計人組織である「TKC」に入会しました。初期指導や巡回監査という、会計人の基礎を習おうと期待していたのです。ところが、入会するなり「TKC秋季大会」が滋賀であり飯塚会長が来られるから、準備から片付けまで三日間、時間を作るようにと申し渡されました。私は、「税理士を目指してから今日まで、子供たちのために一泊の旅行さえ連れて行ってあげていないのに、TKCの祭りに三日間も時間を取られるのは納得できない」と諫言しました。しかし、先輩たちから非難され、その場で「退会します」と、机を叩いて部屋を出ました。進歩的だと思っていたTKCが、既に保身的な、醜い団体だったのです。今思えば、冷汗の出るような短気な対応でした。

悶々としながら、全国の手本となる様な会計事務所を訪問し、良い所を取り入れようと、仲間の税理士達と、足利市やいわき市や札幌市や長崎や東京やと、交通費も困窮する中で全国の会計事務所を尋ね歩きました。後発の私が、何とか我が事務所を良くしたい、共に働く社員を幸せにしたいと必死でした。

そんな時（平成六年）に「会計人コンサルタント」という珍しい名称の、福田茂夫先生に邂逅出来たのです。福田先生は、足利で有名なA会計事務所で、二十年弱働き、独立して、会計人を元氣にしたいというただ一点で、会計人コンサルタントとして活動されていました。お互いに四十二歳、意気投合したのです。

「財務諸表は、社長の心意気・やる氣・魂で、どのようにも変化する」「貸借対照表は、社長の創業以来トータルのお知らせだ」「勘定科目には、社長の意思決定が表現されている」等々、福田先生の一言一言が、私の心に突き刺さりました。まさに「目からうろこ」でした。

その「社長を元氣付けるのは、会計人しかない」「会計人ほど、世の中に役立つ仕事はない」「草莽崛起とは、日本の中小企業の社長三百万人が、良い会社経営をすることだ」と熱く語って下さるのです。

私の求めていたものは、まさにこれだ。約十年の回り道は、決して無駄ではなかったのだ、と心から思えた瞬間でした。その夜は興奮して寝られませんでした。

その日から、中央総研(当時は山川会計事務所)は、揺るぎない方向に動き出しました。早いもので、あれから三十年余、その思いを承継してくれる社員たちが育ってくれました。求めよ、されば与えられます。

社長、それぞれ、仕事内容は違えども、目指すべき理想は同じです。

きれいな心で経営をすると、きれいな財務諸表になります。

さあ、頑張りましょう。応援します。

今月のポイント

財務諸表は社長の通知簿、

年々良くして参りましょう。

